

問題一 評論文 石川九揚『ひらがなの世界―文字が生む美意識』

問一	ア 微妙	イ 迫(る)	ウ 若干	エ 一端
問二	<p>日本語という言葉が先にあり、書き表すための文字として、漢字、ひらがな、カタカナの三種の、文字があるという一般的な考えに対して、筆者は逆に、三種の文字がそれぞれにふさわしい意味、表現、文体を持ち、その集合体として一体となつて日本語がある、と考えている。</p> <p>〈サクラ〉は、漢字の「桜」が抽象的・遠景的な印象を、ひらがなの「さくら」が具体的・日常的な情感を、カタカナの「サクラ」が学術的・分類上の役割をそれぞれ担い、これらが統合されて、一つの〈サクラ〉という語の意味や印象が完成していることを示す。</p>			
問三	<p>「春」「海」をひらがなの言葉に翻訳するだけでなく、「春海」を熟語として構造を明確にし、さらには「春」が「はる」に相当する意味を持つとみなすように、漢語とひらがなの言葉に相関を定着させた、という役割。</p>			
問四	<p>文字を書く行為は、漢字伝来を契機にひらがな・カタカナを創作し、各書記体系が互いに補って日本語の成立と発展を支えた。すなわち、書記体系が言語の根幹となったという意味。</p>			
問五	<p>文字を書く行為は、漢字伝来を契機にひらがな・カタカナを創作し、各書記体系が互いに補って日本語の成立と発展を支えた。すなわち、書記体系が言語の根幹となったという意味。</p>			

※問二(百二十六字) 問三(百二十二字) 問四(九十九字) 問五(八十二字)

問題二 小説文 小川洋子『寄生』

			問一	でも私
			問二	老女が右腕にしがみつくとで与えていた温もり・安心感、すなわち生命の源のようなものが、彼女が離れると一瞬にして奪われたと感じた様子を例えた比喩。
			問三	老女にしがみつかれるうちに、つなぎ目のない自然な一体感を味わった形跡だけが、老女の指や足の跡として残っていたけれども、今は不思議な連帯感を失い、反って虚しい心情を覚えている、ということ。
	問四	イ		老女が必死に僕の腕にしがみつき、か弱い体と無防備な表情で、まるで母乳を求める幼子のような依存を示したため、自然と赤ん坊の表情が連想された
		ウ		彼女の素直で前向きな考え方や感謝の気持ちや瑞々しいほどの純粹さに心酔し、プロポーズを決意したことが、老女への否定的認識を変えた
		エ		深く澄んだ黒い瞳が印象的な点である

※問一（七十二字） 問三（九十三字）

問題三 古文 『伊勢物語』・『万葉集』・藤原俊成『古来風躰抄』

問五	問四	問三	問二	問一			
『伊勢物語』の作者が、田舎人の様子を趣深くあるように描くために、場面に合う古歌を意図的に詠ませるようにした。	女は、無教養ゆえに男が詠んだ歌の真意を理解できず、男が自分を愛してくれているらしいと勘違いしたから。	女には、人並みに情趣を解する心もなく、魅力を感じないから、京に連れて帰る気持ちにならないということ。	その場に合う古歌によせて歌を詠むという一見情趣深い人物であるかのように描くが、実は男の詠んだ歌の真意も理解できないような無教養で哀れな女。	エ	ウ	イ	ア
				なったらよいだろうに	田舎人であるだけでなく歌までもが田舎じみていたとはいうものやはり心打たれたのだからか	中途半端に恋い焦がれて死なないで	京の男を一途に恋しく思っている気持ち

問題四 白居易『白氏文集』

問一	問二	問三	問四
五言律詩	③	いかんすべき	楽しむにはきつと酒を飲み酔うことには及ばないだろう
		問五	しおれた花や枯れた葉を見るにつけ、老いた自分を重ね合わせ、感傷的な思いばかりが多くなってしまったことに、どうしようもない虚無感を抱き、せめて心を癒す酒に気持ちよく酔うために、音楽を伴い少しでも心を安らげたいと嘆く、自身の境遇や人生にわびしさや悲哀にあふれた思い。